

詠

毎日歌壇

伊藤 一彦 選

ミットからこぼれた球が転がって彼らの夏の句点になった。 沼田市 山崎 杜人

△評▽「夏の句点」の表現が出色だ。悔し涙を流した捕手や選手らにとっては今後のサイダーの瓶からサイダーあなたからあなたの言葉とほれるように 東京 石川 真琴

△評▽率直で爽やかな「あなた」の言葉と人柄を十分に想像させる。サイダーがいい。迎え火の代わりに冷酒二つ置き語り合いたい恋の短歌を 春日市 伊藤 亮

凹凸の心をラフワフワの毛布で包む明日も生きるのだから 奈良市 久保 祐子

「生きよう」とだれにともなへん泣き清掃作業は午前五時半 東京 池崎富実夫

折り鶴の少女の願ひには遠きわがゼミ生の核 静岡市 安藤 勝志

はあちゃんの腕に汗がはみ出てと終戦の日が近づいてくる 群馬 金子 歩美

昨夜見た戦争ドラマと今日の新聞地続きの歴史とまじり合 宇都宮市 田代 則子

幾万の石組み合わす野面積み朝日夕日に光る 福岡 村岡 昇藏

米川千嘉子 選

半世紀磨きつづけた大鏡理容の客もわれも老いたり 糸魚川市 田鹿 静夫

△評▽長く理容業を営んできた作者。半世紀のためめない仕事ぶりを表す曇りない鏡があり、それが映す時の流れがある。

約束が二回流れし旬日に友は逝きたり熱中症とう 福知山市 阪梨 義春

△評▽熱中症による死は遠いニュースの中の事ではなかった。記録的酷暑の一首。館内にたたずむ白き彫刻はほほえみのない勝利の女神 川崎市 大平真理子

踏んできた蟬を忘れるほどだった係長から木陰に呼ばれ 四日市市 早川 和博

「見守りのおじいちゃんやうしあしたか」子等訪ね来る風邪ひく我を 流山市 角田 勇

衝突を避けたき我を巻き込みて持論を曲げぬ 若さ頼もし 伊丹市 岡本 信子

三年をかけて不正改正を治した吾子とまだかみ合わず 碧南市 江原 冬莉

いつよりかできなくなった逆上がり反抗心で蹴り上げていた 岩出市 小林 茂晴

加藤 治郎 選

待ち合わせでできる気がする君となら夢の西口改札前で 横浜市 友常 甘酢

△評▽そこはどの駅なのだろう。夢のシンであることわかる。きつと君は西口改札前に現れる。ふたりにはわかるのだ。

言葉より先に涙がやってくる身体がいつも間違っている 所沢市 神田 望

△評▽感情が言葉になる前に涙があふれる。そうあってほしいはない。切ない思いだ。しんしんと疲れているからきみのことおぼい雨だと気づいたよ 今 土佐市 関谷 朋子

ひとの名になれない言葉あることのおしきを思う人さらいの目 横浜市 大原 香花

ほんとうは生まれ変わりたいっていう合図でしょうかブレーキランプ 津市 川原田明子

みどりの色の結婚をする僕たちはガードレールを辿って歩く 京田辺市 渡 つかみ

タオル地のハンカチ渡し八月の噴水前がきみの約束 東京 新井 将

道標のようにひかかって落ちてゆくセロカロリ一の寒天ゼリー 奈良市 古井さくら

水原 紫苑 選

死をとおほい国の舞踊のやうにいふ少女に語る 出埃及記 さいたま市 青木 喩

△評▽死が遠い国の舞踊なら少女はダンスシューズを履いているかもしれない。彼女に十戒が必要だろうか。

寝ていないひとの寝顔をながめつつ煉獄にふる雨をおもった 花巻市 永汐 れい

△評▽魂の浄化を待つれんごくの雨は、夢でもうつつでもない寝顔を降りかかる。ひび割れた鏡に向かい五、六回ツアラトゥス トラと早口で言う 横浜市 安西 大樹

悲しみを飲み干してみた全身が真書になり海になった 横浜市 友常 甘酢

日本語の黒にあたる語目以上あると闇より来た君は言う 浜松市 尾内甲太郎

口の無いオオミスアオの静かなる文尾に霧のインストールメンタル ふじ野市 雨雨雨汰

まなごよりみづにかへらなつゆ草のふかふかとあをき花のあしたに 岐阜 椿 久美

迷いけるマティスの絵ならぶあちのさき真のひかりは祭壇にあり 東京 富岡井高志

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます

次回は12日に掲載します。

おこわい

掲載します。

掲載します。

掲載します。

掲載します。